

『アオバズクの夏』

桑原 紀子

アオバズクは小型のフクロウで、初夏の頃、東南アジアから日本に渡ってきます。

毎年アオバズクが来る広袴のケヤキの大木が、この春、クレーン車で枝払いされました。アオバズクは来るかな？ と、心配でした。

6月になると、ケヤキは生命力を発揮して、残った枝にぐんぐん葉を茂らせました。6月27日の深夜、「ホッホ、ホッホ」と、今年初めての鳴き声が響きました。7月になると、家の近くでも鳴いています。ベランダに出て耳をすますと、暗い谷を隔てて鳴き交わしているようです。翌日の夜、ケヤキの下に行ってみると、傍の電線に黒いシルエットがひとつ。するともう一羽が音もなく飛んできて、ケヤキの茂みに消えました。無事カップルになっていたのです。ケヤキの木は瘤が盛り上がり、洞も空いていて、巣作りが出来そうです。

夜の散歩が楽しみになりました。8時頃ケヤキの下に行くと、いつも電線に止まっています。「ホッホ」と、鳴きまねをすると、じっと見下ろします。シルエットは鳩位の大きさですが、幅広い翼で音もなく飛びまわります。

西緑地の仲間のKさんが、ある日の午後3時、誘いに来てくれました。知り合いのふくろう博士(知らなかったの、びっくり!)の情報で、今、雛が洞の外に出てるので、見に行きませんか？と、言うのです。早

速私も双眼鏡片手に同行しました。Kさんとふたり目を凝らして見ると、ケヤキの瘤の上に、2羽が彫像のように並んでいます。双眼鏡で見ると、身体の大きさに少し差があって、黄色の目は真ん丸です。雛かなあ？ 親たちかもしれないねと、ひそひそ話しました。その夜、再び行ってみると、電線に3羽のシルエットがありました。雛たちが巣から出てきたのです。雛たちはまだぎこちない止まり方で、時々バランスを崩しそうになります。親が2羽傍にいて、空中を飛んで虫をつかまえては、雛に食べさせています。アオバズクの子育てを見るのは初めてです。雛たちは電線と巣穴を行き来して、夏の間少しずつ成長していきました。盆踊りが開かれる頃には、親と同じ位の大きさになり、ケヤキの洞は窮屈になったのか、近くの本に移ったようです。

8月も半ばを過ぎると、日の暮れが早くなり、秋の虫が鳴き始めました。農家の屋敷林からアオバズクが影の様に飛び出して、電線に止まっていますが、3羽だった子どもは2羽しか見かけません。

毎年9月になると、ホッホと鳴き交わして家族で集合し、また海の向こうに帰っていきます。

アオバズクと過ごせた今年の夏、影のように飛ぶ姿を探すのも、あと少しです。